

パネルディスカッション5：在宅における「老年症候群」の認知症、腰痛症を鍼灸にて対応

演題名	腰痛—生物心理社会的疼痛症候群—に対する鍼灸の一考察
-----	----------------------------

概要

日本人の8割以上が生涯において腰痛を経験していると言われている。その予後に関しては、腰痛は生涯にわたり再発を繰り返すことが少なくないと認識されている。また、腰痛患者の8割は形態学的異常が特定されない非特異的腰痛であり、有効な対応方法が定まっていないのが現状でもある。

近年、腰痛は内臓疾患や形態学的異常があるものを除いて、生物心理社会的疼痛症候群として考えられるようになってきた。生物心理社会的疼痛症候群としての腰痛については、身体的・心理的・社会的・経済的などのストレスが要因の一つと考えられている。

このような現状を考慮して、在宅医療を必要としている方々の状況を考えると、その原因である病気や老化（高齢）の他に、先のストレス（身体的・心理的・経済的・社会的など）が少ないとは言えない。そしてまた、このような強いストレス状況下であることに加えて、自立して動くことが困難（運動困難）または、常時同じ姿勢を強いられていることが多い。

無理な不良姿勢を持続することにより筋肉は損傷を受け、筋繊維内の筋小胞体からカルシウムイオンが放出することにより筋収縮を起こす。この状態で各種のストレスや血流不良などが加わると筋拘縮状態になる。

また、筋肉の損傷時に神経も損傷されることがあり、炎症が生じて神経が刺激されるとその情報は脳に伝達されて痛みとなる。筋拘縮状態では、収縮タンパクのアクチンとミオシンが滑り込んだまま元に戻らない状態となり、血流不良によるエネルギー供給が不足して「コリ」を形成する。

生物心理社会的疼痛症候群に対する鍼灸刺激は、軸索反射および体性-自律神経反射の血管拡張作用による局所または身体の各部分の血行循環を改善することで筋拘縮に緩解の対応が可能である。

鍼灸刺激による生物心理社会的疼痛症候群対応は、在宅患者（特に高齢者）には身体的な負担が少ない他、医療保険適応なので経済的な負担をあまりかけることがないQOL維持・改善に有効な方法と言える。